

加賀につづいた琳派 宗雪・相説 —宗達と光琳のあいだに—



重要文化財《秋草図屏風》依屋宗雪 東京国立博物館蔵 Image : TNM Image Archives
—「加賀につづいた琳派 宗雪・相説」より—

- 溶姫の婚礼調度【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 岸派の絵画【古美術】
- 特別展示 加賀の蒔絵と刀装具【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 棚の美と調度【近現代工芸】
- 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 4月の行事予定
- ミュージアムレポート VR体験／対話で！作品鑑賞会
- アラカルト ただいま展示中

企画展(第7～9展示室)

加賀につづいた琳派 宗雪・相説 ―宗達と光琳のあいだに―

4月26日(土)～5月25日(日) ※初日は開会式後(午前10時頃)の入場となります

会期中無休 一部展示替えあり、前期：4月26日(土)～5月9日(金)／後期：5月10日(土)～25日(日)

屏風全体に草花を散らし、幻想的な世界を作り上げた「たはらやの草花図」。「たはらや」とは、琳派の祖とされる俵屋宗達が率いた工房を意味し、その商標たる「伊年印」を有する「草花図」が金沢を中心とした北陸地方で数多く愛蔵されています。

宗達は誰もが知る巨匠ですが、その後継者が加賀・金沢で活動したことは、意外と知られていません。その中心を担った宗雪と相説は、読みが同じ「そうせつ」であることから、かつては同一人物とも思われていましたが、宗雪は加賀藩に仕え、その後継者として活躍したのが相説と考えられています。

この地で長く愛されてきた「たはらやの草花図」は、「加賀につづいた琳派」と呼ぶことができます。本展覧会では、その源流となる宗達の作品から、加賀での道筋を付けた宗雪と相説への作風の転換を探るとともに、五十嵐派蒔絵との関わり、「伊年印」の作品の全40点を紹介します。

【展覧会構成】

第1章 宗達から宗雪、そして相説へ

第2章 宗雪と加賀藩

第3章 相説の転換

第4章 「伊年印」の草花図と五十嵐派の蒔絵

【観覧料】

一般 1,000円(800円)

大学生 800円(600円)

高校生以下無料

※(一)内は65歳以上の方および20名以上の団体

※2階コレクション展観覧料を含む

※身体障がい者・精神障がい者保健福祉・療育手帳をお持ちの方、またはミライロDをご提示の方および付き添いの方1名は観覧無料

【関連行事】

■記念講演会

「宗達・宗雪↓相説・光琳―饒舌館長ベストテン―」

*参加無料、申込不要

講師：河野元昭氏(出光美術館理事)

琳派研究の第一人者であり、東京大学を退官後、秋田県立近代美術館の「饒舌館長」として始めたブログで人気を博する河野元昭先生が、厳選した琳派作品についてしゃべり尽くします。

日時：2025年4月27日(日) 13時30分～15時

会場：当館ホール(定員200名、当日先着)

■土曜講座

*参加無料、申込不要

①「宗雪・相説展を深掘り！」

日時：5月10日(土) 13時30分～15時

担当：中澤菜見子(当館学芸主任)

②「加賀蒔絵を楽しむ」

日時：5月17日(土) 13時30分～15時

担当：野口明日香(当館学芸主任)

③「宗雪・相説『昭和の研究史を探る1』」

日時：5月24日(土) 13時30分～15時

担当：村上尚子(当館学芸専門員)

会場はいずれも当館講義室(定員40名、当日先着)

■当館学芸員によるギャラリートーク

*要観覧料、申込不要

日時：5月11日(日)・18日(日)・25日(日)

13時30分～(1時間程度)

会場：企画展示室

■コラボスィーツ

会期中、館内カフェ「ルミューゼドゥアツシユKANAZAWA」にて、展覧会をイメージしたコラボスィーツを提供いたします。



《四季草花図屏風》喜多川相説 根津美術館蔵



溶姫の婚礼調度

3月25日(火)～4月14日(月) 会期中無休

学芸員の眼

今回の展示作品のうち、尾崎神社所蔵の《三十六歌仙額》は、従来筆者不明でしたが、本展覧会に際して改めて調査した結果、歌仙絵の表現や下絵の特徴から宗達派の制作であると判断しました。

三十六歌仙とは、藤原公任が選んだ36人の歌人のことで、本作品は1枚につき1人の歌仙と一首の和歌が配され、36枚が完備しています。尾崎神社の前身である金沢東照宮は加賀藩四代前田光高(1615～1645)の発願により寛永20年(1643)に創建されており、本作品もその際に制作されました。和歌の筆者は不明ですが、世尊寺家の散らし書きの型が用いられており、候補としては前田家と姻戚関係にあった八

条宮智忠親王(1619～1662)などが想定されましよう。

寛永19(1642)年までには宗達が没し、宗雪が後継者として法橋に叙されており、本作品も宗雪が指揮して制作された可能性が考えられます。加賀藩主による東照宮にふさわしい華麗な歌仙額であり、加賀藩と宗達派の関係を示す重要な事例と位置付けることができます。



石川県指定文化財《三十六歌仙額》のうち「伊勢」宗達派 尾崎神社蔵

前号では婚礼調度に注目したので、今号では婚礼の様子を描いた《姫君入興行列図巻》を取り上げます。本作は、引き移り婚礼の様子を描いた画卷で、行列の様子だけでなく、登場人物の役職や名前などの情報が細かに記されます。

本作は、箱書きに「景德夫人御婚礼行列図」とあることなどから、溶姫の引き移り婚礼を描いたものとされてきました。しかし、画卷中に登場する若年寄が「太田備中守」、つまりは太田資愛となっており、溶姫の引き移り婚礼のあった当時の若年寄「堀田摂津守」つまりは堀田正敦と異なります。また、太田資愛の若年寄在任期間(1781～1789)は、溶姫の引き移り婚礼があった文政10年(1827)と一致しません。

では、これは一体だれの婚礼を描いたものなのでしょうか。

東京国立博物館が所蔵する《徳川種姫婚礼行列図》(山本養和筆)という第十代將軍・徳川家治の養女・種姫の婚礼行列を描いた作品があります。こちらと本作がよく似ており、登場人物の名前や人物、長持ち等の並ぶ順番がおおむね一致しています。また、太田資愛の若年寄在任期間と種姫の引き移り婚礼の時期にも矛盾がありません。このことから、本作は種姫の婚礼行列を描いたものではないかと思われます。

本作の画題については、まだまだ研究すべき点が残されており、現時点での報告として簡単にご紹介いたしました。今後も詳しい調査を続けていく所存です。



《姫君入興行列図巻》(部分)

特別展示 加賀の蒔絵と刀装具

4月20日(日)～5月25日(日) 会期中無休

岸派の絵画

3月25日(火)～4月14日(月) 会期中無休

今年3月より金沢城二の丸御殿の復元工事が始まりました。岸駒とその息子・岸岱をはじめとする岸派の絵師たちは、御殿内の障壁画を複数手掛けています。藩主への謁見の待合室として使用された虎の間の障壁画には、岸駒が虎の絵を描きました。

岸駒は様々な画題の作品を残していますが、「虎の岸駒」の異名をもつほど迫力ある虎を描き、得意としていました。また寛政11年(1799)ごろから自らを「虎頭館」と号するようになりますが、じつは同じ頃、虎の頭部および四脚を入手していたようです。岸家には戦前まで虎の頭部が伝来しており、戦前に撮影された写真が残っています。また富山市佐藤記念美術館には、岸家伝来の虎の四脚が保管されています。現存の四脚は体毛、皮、肉などがリアルに残る

わゆるミイラです。これらを実際に岸駒が所持したという断定はできませんが、本物の虎を見ることが難しかった時代に類似したものを手にしていたならば、大いに画技の参考となったことでしょう。

現在展示中の石川県指定文化財《虎図》を見てみましょう。右隻には画面中央に宙を駆けるような虎が描かれます。金地に虎1匹のみを大胆に配し、幻想的な雰囲気です。一方の左隻には、岩間にうずくまる虎を水墨で描きます。牙をのぞかせ睨みつけるかのような表情は迫力があります。

「虎の岸駒」とも称された岸駒の作品を味わっていただくとともに、かつての金沢城二の丸御殿にも思いをはせていただけますと幸いです。



石川県指定文化財《虎図》岸駒

本展示では、企画展「加賀につづいた琳派 宗雪・相説―宗達と光琳のあいだに―」にちなみ、蒔絵の五十嵐家と刀装彫金の後藤家の作品を中心にご紹介いたします。両家は俵屋宗雪と同時期に加賀藩に招かれて活躍しました。

加賀藩では藩祖前田利家の時代から、藩内に武具の修理を行う細工人が置かれていましたが、三代利常の時に御細工所と称して、大名道具を中心とした美術工芸品の制作も担うようになりました。御細工所では、京都や江戸から名工を招聘して技術指導にあたらせ、現在にいたる工芸王国石川の礎が築かれたのです。

蒔絵では、京都から五十嵐道甫(?～1678)、江戸から清水九兵衛(?～1688)が招かれました。五十嵐家初代の道甫と二代道甫(1635～

1697)は京と金沢を往来して、蒔絵の御用を担いました。清水家は代々京都で前田家の呉服御用を勤めた家柄でしたが、四代にあたる九兵衛が江戸で蒔絵を修得し、金沢へ下りました。今回展示する大名道具や蒐集された貴重な文物の収納箱は、それらの名工が制作したものと考えられます。また後藤家からは、宗家の七代顕乗(1586～1663)と分家の勘兵衛家二代覚乗(1589～1656)とが交替で金沢に滞在して製作にあたるとともに、作品の収集も行いました。展示中の《後藤家装剣小道具》はそうした収集の成果であり、後藤家歴代の技と美を一覧できる貴重なコレクションです。

加賀藩主の座右を彩った工芸技術の粋をお楽しみください。



《連蒔絵箱》五十嵐道甫

近現代絵画・彫刻(第3・4・6展示室)

優品選

4月20日(日)～5月25日(日) 会期中無休

日本画分野では近代美術史に名が残る作家や、他館での展覧会等にも出品された優品をご覧ください。鈴木華邨《竹梅図》は、2曲1双の屏風それぞれに竹と梅を描いています。鈴木華邨は四条派を始め各流派を修めた作家です。竹は墨で輪郭をとる鉤勒(こうりく)填彩(てんさい)という筆法で、対して梅は輪郭をとらない没骨(もっこく)法で表現しています。

油彩画分野では、華やかな色合いが目を引く、山岸光代《花咲くころ》を展示します。作品一枚一枚が自身心の軌跡、と山岸が振り返るように、洗練された軽快な色彩のなかに、瑞々しく繊細な心情がただよう女性の姿が抽象的に描かれています。デザインチックな背景にデフォルメされた女性像というシンブルな構成ですが、高光一也らの指導で培った写実力も発揮されています。



《花咲くころ》山岸光代

近現代工芸(第5展示室)

棚の美と調度

4月20日(日)～5月25日(日) 会期中無休

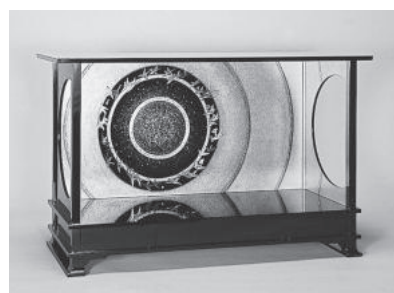
日本の家具には箆筥(たんす)、座卓、机や衝立など様々なものがありますが、とりわけ代表的なものは棚ではないでしょうか。棚は、収納を目的とした実用的な家具として、またあるときには文物を飾るための調度として、多岐にわたる役割を持ちながら、日本人の生活に寄り添ってきました。

そもそも棚は、奈良時代に大陸との交渉から日本へ渡来した、前後二方向から開く扉を持つ戸棚である「厨子(ずし)」が原型といわれていて、正倉院にも残っています。そしてその後、建築様式や時代の変化とともに棚の在り方が変化していきます。特に大きな変化は、室町時代に登場する書院造建築に、付書院(とくしん)や床(とこ)とともに造り付けられた「違棚(ちがひだな)」の登場です。ここには、

「座敷飾り」と呼ばれる中国からやってきた茶碗や花入、食籠(じきろう)などの唐物が飾られました。江戸時代には、「三棚(さんだな)」と呼ばれる大名の婚礼調度や、漆を塗らず木目を活かした素朴な風合いを持つ棚が現れます。近代以降は、工芸作家の登場によって、斬新で新しいデザインを持つ棚が登場します。しかし、戦後は生活様式の変化により、棚は日常生活の空間から姿を消し、芸道の世界や美術作品として残っています。

さて、展示では、大場松魚《平文光輪棚》や初代池田作美《遠州流彫刻桑材飾棚》など、当館が所蔵する近現代工芸の棚を紹介します。

※松田権六《蓬萊之棚》の展示はありません。



《平文光輪棚》大場松魚

4月の行事予定

■のびのび鑑賞デー

作品について感じたこと、思ったことを、お話ししながらコレクション展を楽しめる日です。

※ただし、通常の開館日のお客様同士の会話を制限するものではありません。

日時：4月7日(月)9時30分～18時
(展示室への入室は17時30分まで)

会場：2階コレクション展示室

*のびのび鑑賞デーのご利用に、特別な手続きは不要です。

■企画展

「加賀につづいた琳派 宗雪・相説一宗達と光琳のあいだに」関連行事

記念講演会

「宗達・宗雪→相説・光琳—饒舌館長ベストテン—」

講師：河野元昭氏(出光美術館 理事)

日時：4月27日(日)13時30分～15時

会場：講義室

*聴講無料、申込不要

令和7年度の展覧会スケジュールパンフレットを配布中！

4月からの展覧会をまとめたパンフレットをお配りしております。国宝《色絵雉香炉》の表紙が目印です。どんな展覧会が開催されるか、ぜひチェックしてみてくださいね！当館公式ウェブサイトでも公開中です。皆様のご来館をお待ちしております。

(URL:https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/wp-content/upload/2023/03/nenkan_2025.pdf)



第3～9展示室

第81回 現代美術展 日本画・工芸・書

主催／一般財団法人石川県美術文化協会、北國新聞社、
一般財団法人石川県芸術文化協会、北陸放送、テレビ金沢、
石川県、金沢市、石川県教育委員会、金沢市教育委員会

3月28日(金)～4月14日(月) 会期中無休

◆部門

日本画・工芸(第3・4・5・6展示室)

書(第7・8・9展示室)

※金沢21世紀美術館では、洋画・彫刻・写真が展示されます。

昭和20年10月に第1回展が開催された現代美術展は、本年81回展を迎えます。その間、文化勲章受章者、日本芸術院会員、人間国宝をはじめ、多くの実力作家を生み出し、その成果は「美術王国石川」として大きく花開いております。

本展では、所属会派を超えて、日本画・洋画・彫刻・工芸・書・写真の6部門から、石川県美術文化協会会員らの秀作と、一般公募からの入賞・入選者の意欲作を一堂に展示します。

◆作品解説

会期中、石川県美術文化協会役員、会員による作品解説を行います。

◆連絡先

一般財団法人石川県美術文化協会

電話：076-260-3581(平日午前10時～午後6時)

◆観覧料(金沢21世紀美術館と共通)

	前売り	当日	一般	高校・大学生	小・中学生
	900円	1,000円		700円	600円
		600円			500円

団体(20人以上)は団体割引(前売り料金から100円引き)

※当館友の会会員は会員証の提示で団体料金

対話で！作品鑑賞会

令和7年2月9日(日)開催

みなさんは普段、展覧会とそこに展示されている作品をどのように楽しんでいるでしょうか。お友達やご家族と楽しく、あるいはひとりでゆっくりと。様々な楽しみ方があると思いますが、本プログラムでは「対話による鑑賞」を行い、作品の楽しみ方をご提案する機会とさせていただきます。

学芸員がファシリテーター(進行役)となり、あらかじめ選んでおいた作品の前に集まって、作品から感じたことを話したりつぶやいたりする時間です。知らない人同士が集まっても、同じ作品を見て色々な発見をするのは楽しい体験であり、他の人の意見に「なるほど！」と思つて面白かった、という方が多かったです。

この日は、判三教《待春》(1990/油彩画)、坂垣道《チンドン屋》(1981/彫刻)を鑑賞しました。

《待春》では、「鳥を発見！」「心の中の風景かも」「服が平成初期っぽい」など、様々な意見が飛び出しました。《チンドン屋》では、「悲しそうな顔：」「お疲れのチンドン屋さん」など、作品にあらわされた人物に寄り添った(?)意見がたくさん。この2点の作品を、それぞれ約15分ずつ鑑賞してお開きとさせていただきます。こんなに時間をかけて作品を見る機会も、なかなかないと思います。初めての鑑賞方法にご関心をもつていただけたのではないのでしょうか。

このプログラムは、今後も開催していく予定です。本紙のイベント情報をご確認のうえ、ご参加いただけますと幸いです。



前田家伝来 国宝《金沢本万葉集》VR体験

令和7年1月13日(月・祝)開催

当館2階コレクション展エリアにあるVRシアターは、令和5年7月にオープンしました。同年10月には、映像作品「前田家が伝えた万葉集―心揺さぶるいにしへの想い―」が新たに加わり、現在「美を紡ぐ、そして文化を育む―加賀前田家から現代へ、そして未来へ―」「色絵雄香炉―悠久の時を超えて―」を合わせた3つの映像を毎日上映しています。また、作品の超高精細画像から精製したVRモデルやVRコンテンツを活用した体験イベントを、定期的に開催しています。今回は、国宝《金沢本万葉集》(前田育徳会所蔵)の映像やVRコンテンツを活用したイベントについてご報告いたします。

はじめにVRコンテンツを用いて、参加者に現代語訳から歌の情景をイメージしていただく、簡単なワークショップを行いました。次に、高岡市万葉歴史

館学芸課長の新谷秀夫氏を講師に迎え、国宝《金沢本万葉集》と加賀藩前田家のつながりや、古典研究における本作の価値などについてご講演いただきました。その後、映像「前田家が伝えた万葉集―心揺さぶるいにしへの想い―」をご覧いただき、最後に国宝《金沢本万葉集》のVRコンテンツを、参加者に操作体験していただきました。

講演の後に作品に関する映像を見て、VRコンテンツの体験をすることで、理解を深めていただくことができたのではないのでしょうか？また、実物を常設展示できない作品だからこそ、VRコンテンツを通して作品を鑑賞いただく機会となりました。今後もVRシアターを活用したイベントを開催予定です。皆様のご参加をお待ちしております。



《兎福寿草図》うさぎふくじゅうそうす

縦35.0 横97.4 (cm)
天明2年(1782)

岸駒 がんく

寛延2/宝暦6年(1749/56)~天保9年(1838)

岩の間にたたずむ3匹のうさぎと黄

色の花を咲かせた福寿草を描く、なんとも可愛らしい作品です。手前の1匹が遠くを見つめ周囲を警戒する様子で、真ん中の茶色いうさぎは、空を見上げています。一方、奥に描かれた白いうさぎは、2匹の心配もどこ吹く風で目の前の福寿草に手を伸ばさんとしています。うさぎは子孫繁栄を象徴し、福寿草は新年を祝う花として用いられ、「元日草」とも称されます。本作は、おめでたいモチーフを組み合わせた吉祥画です。

作者の岸駒(1749/56~1838)は、生まれ年、出身地ともに謎の多い絵師です。出身地は金沢とも富山ともされますが、少年から青年期を金沢で過ごしたゆかりの作家です。上京後は、有栖川宮に見いだされて仕え、御所や公家などつながりを持ち、岸派を開いて当地で活躍しました。また、文化年間における金沢城二の丸御殿再建の際には、一門を率いて金沢に下向し、表式台と虎の間の襖絵を担当しました。

本作は、岸駒が「蘭斎」と称していた

ころの初期の作品です。崖と前景の処理に曖昧さが残りますが、うさぎの毛並みや岩の点苔などが、細やかに描き込まれています。若き日の岸駒の絵に対する誠実な態度が感じられるようです。こちらは3月25日(火)から4月14日(月)に開催のコレクション展「岸派の絵画」に出品中です。ぜひこの機会にご覧ください。



次回の展覧会

令和7年5月31日(土)
~6月29日(日)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
歴代藩主の甲冑・陣羽織	古九谷・再興九谷
第3・4・6展示室	第5展示室
優品選/床を飾る 【近現代絵画・彫刻】	海、波、うらうら 【近現代工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

4月7日は第1月曜日より

コレクション展観覧無料の日

開館時間

午前9:30~午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00~午後6:00

4月の休館日は
15日(火)~19日(土)

石川県立美術館だより
第498号(毎月発行)
2025年4月1日発行

〒920-0963

金沢市出羽町2番1号

Tel:076(231)7580

Fax:076(224)9550

URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。

Try it!

オンライン講座あり

自宅学べるデザインスクール

デザインスクールの無料体験をお試いただけます

デザインの学んでスキルアップ・副業・転職・独立・趣味等可能性を広げよう!!

子育てママ・パパもデザインで在宅ワーク!

大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501 TEL.072-668-3275 運営/株式会社ウィット